

3. 危急時対策

危急時における対処体験

私の危急時体験

松本 憲親

屏風岩壁雪崩の巣からの脱出

1985年年末は雪が少なく低温が続き、霜ザラメ層と雪板の発達が予測されたが筆者らの向かった屏風岩右岩壁はその名所であって過去に犠牲者を出している。12月31日夕刻迫るころ、大ジェードルルートの終了点近くをリードしていてルンゼのどん詰まりに差ししかかった。150㎡程の雪面の先はブッシュ帯となっている。傍らのブッシュに掴まりながら雪面に片足を乗せたとたんにごソソと大きな音がしてその雪面が5cm程沈下したかと思うと次の瞬間に雪崩落ちて行った。予測していたので別に驚きもなく、「やはりな」と一人ごちた。その夜は終了点でビバークしていると雪も降るし、翌朝からの下降は沢を避けて避けて尾根っぽい所を選んで右下へ右下へと下降を続け、1ピッチの懸垂下降で安全地帯に逃げ込めると思える所まで到達したのであった。

懸垂下降中に「下に降りたらボルトを2本打ってロープを2本繋いで安全地帯に到達しよう」と考えていた。ところが着地した所はバンバンに固まった堅雪で跳んでみてもビクともしない。目の前20m程の所には一抱え以上の太さのブナがズラリと並んで、おいでおいでと言っている。先程の予定を完全に忘れてボルトもロープも無しに、行けると判断して了った。それでもパートナーには離れて降りて来いと言っておいて先行した。

4歩迄はしっかりしていた雪が5歩、6歩目から急に軟らかくなって足先がフワフワしている。「これはイカン」と引き返すべく、急いで後ろを向いた途端に雪は筆者を乗せて滑り出し、アッと言う間に100mも流されて止まった。雪崩の巣の落とし穴にはまった失敗談である。

前穂北尾根コンティニューアス下降中のスリップ

1979年1月、前穂東壁を登った橋本、川内、筆者の3名は北尾根を下降した。4峰の下りだったと思うが3人はOMのコンティニューアスで下っていた。先頭の川内がゆっくり滑り出したので、ミドルの松本は待ってましたと、アックスを打ち込み半身に構え、足を踏み込んでロープを初期制動に構えた。川内は松本の初期制動だけで停止したが、橋本も川内も「もう3人一緒に落ちることしか考えなかった」と言っていたが、筆者は滑落速度が遅いと思っただけだった。

片足を負傷してカクネ里から脱出

1978年4月末、鹿島槍ヶ岳北壁に取り付こうと紫岳会の筆者ら3人はくの字ルンゼを下降したが、クラストした雪面にクランポンを引っかけた筆者はポンポン弾みながらカクネの底目がけてすっ飛んだ。左膝のじん帯を切って、ぶらぶらになって厩れてきた。雪洞を掘ってその日を過ごし、翌日カクネの底をスキー板のソリに乗せられ、遠見尾根の裾に到着した。700mほどの高差のテント場尾根を

3. 危急時対策

片足で登るのだが、痛めた足の内側にアイスアックスを、外側にスキーストックを当ててスリングで縛った所痛めた足だけで体を支えることができるようになった。2人にロープで確保してもらいながら自力で遠見尾根の上まで途中1泊で上がることができた。丁度そこへ紫岳会の別働パーティーが入山してきた。皆はすぐさまソリを組み立てて筆者を乗せてゴンドラまで曳いて行き、大阪まで連れて帰ってくれた。

(岳僚山の会)